

生長の家は“万教帰一”の教えにもとづき、世界の宗教と相互協力して
神・自然・人間の大調和の実現に向けて前進します！

万教包容の御祭

生長の家国際本部で執り行われる御祭の様子がフェイスブックの「生長の家“森の中のオフィス”」でライブ配信されます。

日時：令和6年**7月7日**(日) 11:00 開式～ 12:00 頃閉式

用意する物：『観世音菩薩讃歌』

ご家庭のパソコン・スマホ・タブレットから視聴することができます。
いずれかの方法でアクセスしてください。



URL : <https://www.jp.seicho-no-ie.org/news/20240707/>



生長の家は1930年(昭和5年)立教以来、すべての宗教の教えの中心部分は皆同じ真理を説いているという“万教帰一”を教義の重要な柱として布教を行ってきました。生長の家国際本部“森の中のオフィス”「万教包容の広場」は、この万教帰一の教えにもとづいて、世界の宗教に共通して存在している、神の創造や仏の“表れ”としての自然を尊ぶ思想を認め合いながら、各宗教が神・自然・人間の大調和の実現に向けて相互協力して前進することを誓願する場として開設されました。毎年“森の中のオフィス”落慶式が行われた7月7日(『万教包容の神示』が天降った日)に万教包容の御祭が執り行われます。

“森の中のオフィス”「万教包容の広場」

万教帰一の御教えを象徴する「御神像」と「七重塔」について

“森の中のオフィス” 落慶式での総裁谷口雅宣先生のお言葉より

(前略)「万教包容の広場」というのを敷地(注:“森の中のオフィス”)の北側に設けました。神像と七重塔は、そこに置かれています。この二つの施設の映像(図1)です。向かって左側が神像ですが、これはキリスト教の聖書の一番最後の書である『ヨハネの黙示録』の第二章に描かれている「七つの燭台しよくだいの間を歩く者」のことで、ま、ひやくだい「神」と読んでも、日本語では間違っているとは思いますが、生長の家では正式にはそう呼ばずに、「七つの燈台の点燈者」と呼んでおります。

聖書を読むと分かりますが、この「七つの金の燭台の間を歩く者」というのは一種の比喩ひゆでございまして、「七つの教会に命を与えるもの」という

意味で書かれております。生長の家ではこれを解釈して、「七つの宗教に灯を点ずる」——神からのメッセージを与えている——そういう意味だと考えております。つまり、一つの真理が七つの宗教として表現されている——「七つ」という数字は、西洋においても東洋においても「完成」とか「全体」を意味しています。ですから、すべての宗教の“出所”は一つの神であるという考え方を象徴するものとして、私たちはこの神像を掲げています。

これは決して「偶像」ではありません。私たちが「万教帰一」と呼ぶ考え方——教えの象徴として掲げてきたものであります。それを大都会からこの敷地に移設して、改めて尊重していこうということがございます。多少、キリスト教的な色彩をもった施設であります。

これに対して、画面の向かって右側(図1)にあるのは仏教的色彩のあるものです。日本はやはり“仏の国”ですので、仏教的伝統も尊重するのでなければいけない。昔から仏教の世界では多宝塔たほうとうとか、三重塔、五重塔、七重塔などの「塔」が造られてきました。この塔の基本的構造を見ると、中心に一本の“芯しん”が上から下へと貫通くわんつうして、これに対して、横方向にたくさんの屋根ほりや梁はりが出て階層を構成している。これは、仏教において「一仏一切仏いちぶついつさいぶつ」という言葉で表現されているものが象徴されているのであります。

特に、多宝塔というのは『法華経』の「見宝塔品けんほうとうほん」に書かれているように——釈尊が教えを説かれているそのクライマックスのときに、地中から巨大な多宝塔が出現して教えの素晴らしさを讃えたというエピソードにもとづくものです。多宝塔は基本的には二層構造ですが、それを含めて三層、五層、七層など、「塔」にはいろんなバージョンやデザインのもので中国各地や日本の寺院、仏閣にはあります。私たちはそのどれかをコピーするのではなくて、いくつか生長の家流にアレンジを加えさせていただきました。

七重塔は、従いまして万教帰一の考え方を仏教的に表現したものでして、それを神像と同じ広場に置き、目に見えるかたちで「神」と「仏」を共存させました。このように、万教包容の広場は、各宗教に共通している真理をお互いに認め合い、協力し合っていく時代に来ているという私たちの認識を表現するものであります。(後略)



図1 「御神像」と「七重塔」

(機関誌「生長の家」2013年10月号より)